HITOKOMART No.4

篠原ユキオ

1948年　東大阪市生まれ
京都教育大美術科卒
京都精華大学名誉教授
（公社）日本漫画家協会参与
FECO JAPAN 会長

捕らえられたグリコランナー

『とらえられた宇宙人』の写真は、有名な1枚である。長い間、宇宙人ネタとしてまことしやかに語られる事が多かった。実はこれは1950年に、ドイツケルン市のある雑誌が4月1日のケルン市のある雑誌が4月1日の創刊号にあわせて掲載したエイプリルフールの企画モノだったのだそうだ。外国のエイプリルフールネタは日本ではみられないスケールの大きい物をよく見聞きする。しかし現代は、膨大なネット情報の中に無数の悪意に満ちた嘘が散りばめられていて、笑い話で済ませられない状況を作っている。

F-30号

A-3

罠

ＵＦＯと妖怪はその存在の不確実さから、いつの時代にも人々の好奇心を刺激してきた。
人類が月や他の惑星にロケットを着陸させる時代になっても、ＵＦＯはいまだに『未確認』のままである。
ＵＦＯと呼ぶようになったのは日本テレビの矢追さんの特番からだと思うが団塊の世代にとっては『空飛ぶ円盤』という呼び方が懐かしい。
定版のアダムスキー型空飛ぶ円盤は後年、アメリカ製のランタンの部品であるという証拠を突きつけられるのだが、それでも多くの漫画家たちはこの形を描いてきた。
そしてＵＦＯはこれからも『未確認』のまま、人々の心を惹きつける。
妖怪と同様に、人は得体の知れないものに恐れを感じながらも、惹き寄せられてしまうのである。

擬似餌

昔、フライフィッシングにハマった事がある。
ブラビ主演の映画に魅せられてのことだが、遂にはオリジナルのフライ（擬似餌）を自作するようになった。
そのフライで釣れた時の嬉しさはひときわ大きいのだが、竿を振った時に糸が後方の木の枝などに引っかかってしまい、糸が切れて持っていかれた時などは、作品を取られた気分になったものだ。
そんなわけで各地の渓流傍には今もいくつかの僕の作品が残されている。

近年、ゲートボールをする老人たちの姿をあまり見かけなくなった。
高齢者にはうってつけという事もあってお年寄りのスポーツとして定着し全国に広まったものだが、そのゲートボール人口が急激に減っている。
原因は競技世代の高齢化かとも思ったが違うようだ。

修行中

年寄りのスポーツというイメージを嫌がる元気な老人たちはテニスや卓球など他のスポーツを選ぶようになった事、五人単位のチームプレーというスタイルのためにトラブルにつながる事が頻繁にある事が一番らしい。
老化による協調性の欠如や怒りのコントロールがきかない『キレやすい老人』が増えている事を考えるとさもあらんと思う。
まさに『心・技・体』の三拍子が揃わないとなかなか難しい競技のようである。

A-1

A-3

見る

小学校４年生の頃だったと思う。
親にねだって顕微鏡を買ってもらった。
それまではちょっと大きな虫めがねで見る程度のものだった世界が一気に何百倍にも広がった。
自分の周りにある物を片っ端からスライドガラスの上に乗せて覗き込んだものだった。
当然のことながら肉眼で見ているものとは全く違う形や色がそこにある。
物を認識するのはそれぞれの見え方によって違うのだが、人は自分の目で見ているものたものが全てだと思ってしまうものである。
いろんな目を持つことの大切さを最近あらためて感じさせられる事が多い。

F-50号

壁ドン

高校生の時の日記が残っている。当時の想いを拙い文章とイラストで描いている。

人間関係や進路や学校生活や…誰にも話すことのなかった当時の自分がそこにある。

読み返してみるとその多くが同じ学年にいた家内の事を描いたものであり、イラストはいつも彼女の顔を描いたものだった。

しかし家内にその想いを伝えたのは大学卒業前の２２歳の冬だったから7年近くその想いを心の中に秘めていた事になる。

この日記帳にはびっしりとその頃の想いが詰め込まれている。

２４歳で家内と結婚して、彼女が亡くなるまでも、それは一度も話したことも見せたこともないまま学生時代の荷物の中にしまい込んでいる。

昨今の恋愛ドラマのように、街中で大声で『君が好きだ！』とは絶対に言えないシャイな昭和世代には、こうして好きな女の子への想いは、人目の無い路地裏の壁に描く落書きが精一杯なのである。